

緒言

自分自身では実感が無いが、私は今年の八月三日に古稀を迎える。満七〇歳である。それを祝ってこのような古稀記念論文集を制作してくださった方々、論文をお寄せ下さった方々に、まず、心からのお礼を申しあげたい。現在、私は親鸞と妻惠信尼や家族の伝記、および中世の浄土真宗史に集中して研究を進めている。皆様のお許しを得て、ここにいたるまでの私の研究の軌跡を振り返ってみたい。

私は一八歳の時に東京教育大学文学部史学科日本史学専攻に入り、浄土真宗の一向一揆に関する卒業論文を書いて卒業した。その後、神奈川県の高校教員となり、さらに二六歳の時に東京教育大学大学院文学研究科日本史学専攻の修士課程に入って、鎌倉時代の念仏僧一遍の研究を始めた。四年後に博士課程に入り、さらに四年後、博士論文「時宗成立史の研究」をまとめて大学院を修了し、文学博士の学位を授与された。時宗とは一遍が始めた仏教の一派である。

三四歳、大学院修了と同時に、茨城大学人文学部に日本古代中世史担当の助教授として赴任した。以後、時宗と一遍の研究を引き続いて行い、あわせて鎌倉時代の武士たちの信仰を追い、さらには茨城県の中世を軸とした歴史を追究するという三本立ての研究態勢をしいた。また私は、茨城県が親鸞の四二歳からの約二〇年にわたる活動地域の中心であったという絶好の環境を得たことにもなっていた。そこで東国の親鸞と門弟たちのことについて、数年間の準備期間をもとにして四〇歳のころから論文を発表し始めた。

茨城大学で教授に昇任して間もなくの四五歳の時、初めてアメリカに渡り、半年間の研究生生活を行なった。ここでアメリカの研究者の優れた日本研究を知ることができ、大いに影響を受けた。それは歴史学・宗教学・文学

を総合的に考察する方法であり、およびその視点を現代の世界情勢から鍛えるという方法である。

以後、私は今日にいたるまでアメリカ、ヨーロッパ、アジア、そしてアフリカの大学や研究所を積極的に訪問し、また客員教授として招かれて講演・授業を行なってきた。この間、次代の世界を担う学生諸君と交流できたことも大きな喜びである。

五〇歳前後から、一遍研究やその他の仕事も入り続けていたけれど、私の意識としては親鸞とその家族の伝記と浄土真宗史の研究に集中するようになった。

五三歳の時に筑波大学歴史・人類学系に移り、学生の教育は第二学群日本語・日本文化学類を担当することになった（筑波大学は、教員の研究組織と学生の教育組織が別である。教員は複数の組織に籍を置いている）。この日本語・日本文化学類の卒業生が世界各地で日本語の先生として活躍しているので、そこを訪ねて現地の方々と交流できたこともありがたかった。

五七歳の時に筑波大学大学院の歴史・人類学研究科長に就任し、翌五八歳の時には日本語・日本語学類長に就任して六三歳の定年退職までその管理職の任にあった。

実をいえば、アメリカに渡った時から世界的な視野での研究に関心が増し、その活動に邪魔な大学行政の仕事には関わるまいと心を決めていた。間違いない忙しい毎日となるからである。したがって管理職になった時は、「しまった、これで研究のスピードは大幅に遅れる、論文は書けなくなる」と思ったものである。「それなら、一般の方々向けのやさしい、分かりやすい内容の書物をたくさん作ろう、その時間は作れるだろう、同じく講演も行なおう」と考え直して、管理職の仕事と並行して、その合間にそれらを行なうように努めた。

幸い、研究のスピードは覚悟したほど遅れなかった。加えて一般向けの書物はたくさん出版することができた。いろいろ困難なことはあったが、学類長時代五年間はとてもおもしろかった。さまざまな種類の仕事ができ、学生諸君を含めていろいろな人たちと接することができた。そのことは自分の研究を進める上で、その視点を磨くのに役立った。管理職への就任は、決して研究進展のマイナスではなかった。また外国での修羅場も何度かあった。もうこんなことを経験したら日本での仕事などんなことがあっても恐くもなんともない、という体験もした。いまだにそう思っている。これらのこともすべて研究と出版に生かしてきた。

六三歳で筑波大学を定年退職し、東京・西新橋に真宗文化センターという研究機関を設立してもらって所長に就任し、五年たった。関係者のご尽力でセンターは発展の時を迎えている。期待する若手（年齢にかかわらず）の人材も育ってきている。私はこれを心から待っていた。

私の研究の基本的立場は、歴史を現代に生かすこと、である。歴史上の事実を、その時代の社会的状況と住む人の常識を背景にし、史料価値を厳密に検討しつつ明らかにする。その事実の選択は、現代社会の課題をもとに行なう。その「現代社会」は常に進んでいくので課題も変化するから、そのことを忘れてはならないのである。

さて本書は、親鸞とその後の浄土真宗史に関わるテーマの研究論文をお寄せいただいて一冊としたものである。お寄せ下さった研究者は、日本国内のみならず、アメリカ、中国、台湾の方もおられる。それが本書の特色の第一である。論文の内容はさまざまであるが、全体を文化史の観点から分類して目次を立てた。親鸞と浄土真宗は日本の文化発展に大いに貢献して来たし、それはこれからも続くであろう、そして続けさせねばならないという観点からである。その観点が本書の第二の特色である。むしろ、研究内容そのものに関わる見解はそれぞれの筆者によってさまざまである。統一されたものではないし、統一するつもりはさらさらない。

私としては、今日にいたるまでに研究上お世話になった方々のお名前をすべてあげてお礼を申し上げたいといこ

ろである。しかしそうもいかないもので、次の方々のみ、お名前をあげて謝意を表させていただきたいと思う。

まず大学院を修了する時に博士論文の主査を務めて下さった故・桜井徳太郎東京教育大学名誉教授、歴史学の何たるかを親身に教えて下さった中尾堯立正大学名誉教授、浄土真宗研究の目標として輝いておられる平松令三もと龍谷大学教授、浄土真宗研究に本格的に参入させて下さった梯實圓もと浄土真宗教学研究所所長、真宗研究の成果を次々に公にして下さった金松俊一もと真宗大谷派宗務所出版部部長。それから世界に目を開かせて下さった、故ウイリアム・ラフルーア・ペンシルヴァニア大学教授（アメリカ）、マーティン・コルカット・プリンス頓ン大学教授（同）。

さらに本書編集委員会の山田雄司三重大学教授、阿部能久鎌倉市世界遺産登録推進担当学芸員、小山聡子二松学舎大学准教授、および出版を引き受けて下さった株式会社思文閣出版にはここであらためてお礼を申しあげたいと思う。

最後に私事にわたることを記すことをお許し願いたい。結婚以来まもなく四四年、常に私のことを案じ後押しをしてくれている妻元子に特に感謝の気持ちを表したい。私にとって「親鸞とその妻恵信尼」という研究テーマが成り立っている理由でもある。また娘宮本千鶴子と今井（玉田）澄子にも感謝をしたい。娘たちがいなければ、「親鸞と息子善鸞、娘覚信尼」という研究テーマは考えつきもしなかった。それだけでなく、家族があることにより研究に無限の広まりと深まりが与えられていることを実感している。

今後、本書に論文をお寄せ下さった方々とともに、さらに研究の道に進んでいきたい。

二〇一二年三月二三日

今井雅晴

中世文化と浄土真宗◆目次

緒言

親鸞伝の新展開……………今井雅晴 3

□ 中世文化の中の浄土真宗

空海の御影とその儀礼環境……………阿部龍一 29
——中世密教の視覚性と正統性の関連について——
穢と不浄をめぐる神と仏……………山田雄司 51
覚如と呪術信仰——治病と臨終に対する姿勢をめぐる——……………小山聡子 71
真宗三尊考……………飛田英世 90

□ 法然から親鸞へ

建永の法難と九条兼実——法然伝の検討を通して——……………平 雅行 113

親鸞の「転入」の解釈学(要旨)	ヒロタ・デニス	135
悲しき学び	田村晃徳	137
親鸞と良忠——その教化と教説——	永村 眞	159
法然の残影——覚如と存覚のあいだに——	市川浩史	178

【三】 親鸞の思想

『教行信証』の不思議さの読解(その一)	張 偉	197
——「化身土」の「弁正論」の引用について——		
親鸞の聖徳太子観	佐藤弘夫	218
親鸞における臨終行儀の否定(要旨)	ジャクリン・ストーン	236
「二河白道の譬喩」伝播の鳥瞰的考察	山本浩信	238
田辺元の『懺悔道としての哲学』における親鸞解釈	末木文美士	256

【四】 親鸞とその家族

浄土真宗における恵信尼について(要旨)	ジェームズ・C・ドビンズ	279
恵信尼と同時代を生きた三善氏	樋川智美	279
「本願寺」成立の再考	林 蕙如	312

真宗史における善鸞伝私考	御手洗隆明	334
存覚、顕密寺院と修学文化	ブライアン・小野坂・ルパート	357
——「一四世紀における唱導の報恩言説、諸宗兼学および浄土教聖教に関する」考察——(要旨)		

【五】 親鸞とその門弟

初期真宗門徒における師と弟子——門徒形成の契機として——	植野英夫	361
親鸞門弟中における「沙門」と「沙弥」	山田雅教	384
佛光寺発展の意義——了源・存覚を中心として——	楠 正亮	403

【六】 浄土真宗の展開

本願寺歴代宗主の伝道——善如期から存如期を中心にして——	高山秀嗣	423
「御文」にみる専修念仏言説の一特質	神田千里	440
蓮如の善知識観——中世真宗教学における教導者観の展開——	黒田義道	460
天文期加賀における「超・本願寺体制」の再検討	大溪太郎	480
——超勝寺の動向を中心に——		
北方地域と浄土真宗	佐々木馨	501

今井雅晴先生履歴年譜
今井雅晴先生業績目録
編集後記
執筆者紹介

- Zonkaku, Established Buddhism, and the Culture of Learning: Brian O. Ruppert (68)
Debts, Trans-lineage Study, and the Creation of Pure Land Buddhist "Scripture"
in the Fourteenth Century
Eshimi in the History of Shin Buddhism James C. Dobbins (48)
Shinran's Rejection of Deathbed Rites Jacqueline I. Stone (29)
Shinran's Hermeneutics of Entry into Religious Awareness Dennis Hirota (1)

中世文化と浄土真宗

親鸞伝の新展開

今井雅晴

はじめに

浄土真宗教団諸派では、親鸞の大規模な年忌法要を五〇年ごとに行なってきた。昨年（二〇一一年）はその七五〇回忌にあたっていた。諸派では、数年以上前からそのための準備を始めた。親鸞の伝記研究も、教団内外であらためて注目されてきた。ただ歴史的な存在としての親鸞像と、歴史を超えて崇敬されてきた親鸞像とは、必ずしも同じではない。統一される必要もない。統一的に把握しようとするが無理が生じ、誤解も生じる。

筆者は双方を考慮しつつ、研究を進めてきた。本稿では主にその成果をもとにして、歴史的な存在としての親鸞像・親鸞伝が現段階でどの程度まで進んでいるかを包括的に示していく。また親鸞は家族や門弟の中で生き、宗教的境地を深めたのであるから、家族と門弟にも注目したい。⁽¹⁾

一 京都の親鸞

(1) 親鸞の出身

親鸞は平安時代末期の承安三年（一一七三）に日野有範の長男として誕生した。藤原氏の末流である。一時期、親鸞は庶民の味方、その親鸞が貴族の生まれであるはずはない、貴族の出身であっては困るといふ雰囲気がある。しかし親鸞の宗教の歴史的意義は、師匠の法然と同様、宗教の階級性を取り払ったところにある。すべての人々を救うとするのが親鸞の念仏である。出身が貴族であろうと庶民であろうと問題ではない。

それに親鸞の父有範の朝廷での職は皇太后宮大進である（覚如『親鸞伝絵』および日野氏系図）。位でいえば、従六位上に過ぎないから、下級貴族ではない。もし、庶民出身なのに貴族出身であると嘘をつきたいのだらたら、親鸞は関白の息子だった¹⁾ というような高い身分の貴族出身とするだろう、父は皇太后宮大進としていたことこそ、正直な告白、正しい伝えであるという意見がある。それが妥当であろう。

また親鸞の名著の『教行信証』の漢文の点の打ち方は日野家流であるという見方がある。当時の貴族の男性は六歳の時から漢文を叩き込まれた。まして日野家は儒学を家学とする家柄である。家柄によって、多少、点の打ち方が異なっていたようである。後年の親鸞が日野家流の点の打ち方を使っているからには、『親鸞伝絵』や日野氏系図等と考え合わせて、親鸞は日野家出身として誤りあるまい。

(2) 比叡山の修行の評価

親鸞は九歳の時に出家した。養和元年（一一八二）のことである。のちに関白になった九条兼実の弟の慈円が戒師となって出家させたという。有範は前年の以仁王の乱に参加したという噂もあり、まして息子五人も含めて親子全員が出家という異様な状況に追い込まれた下級貴族である。慈円がその息子の戒師となってあげたかどうか、問題は残る。

出家の時の状況がどうであっても、親鸞が以後二九歳の時まで二〇年間、比叡山延暦寺で修行したには違いな

い。その二〇年間の様子はよく分からない。比叡山時代のことだけではないが、江戸時代になると親鸞の伝記を詳しく記した書物等が現れる。しかし、その扱いは慎重を期すべきである。江戸時代の人たちが親鸞をどう見ていたかを知る史料としては興味深い、歴史上の親鸞を解明する史料としてはあまり使えない。なにせ親鸞が没してから四〇〇年以上経ってからの史料である。それらは、世人に信用してもらうために、有名な人が書いたものを写した、参考にしたと記されていることもあるのである。

長い間、親鸞は二〇年間の修行で悟りも得られなければ極楽往生の確証も得られなかった、それは比叡山での修行がよくなかったからだといわれてきた。しかしつい近年、そうではなくて親鸞が修行に失敗しただけのことであること、さらに、この二〇年の苦しい体験があったからこそ、のちの発展につながったのであるとする見解が現れた。まさにそのとおりであろう。二〇年の修行は、実に意味があったと評価すべきである。²⁾

(3) 六角堂参籠の意味

恵信尼の書状によれば、親鸞は一〇〇日間の予定で京都・六角堂に参籠して後世の極楽往生を願った。なぜ六角堂だったかといえば、悩む修行者を導いてくれる存在として、六角堂の本尊観音菩薩は京都でもっとも権威があったからである。『梁塵秘抄』の中で、

観音験を見る寺 清水・石山 長谷のお山 粉河・近江なる彦根山 ま近く見ゆるは六角堂
と、当時の流行歌である今様に記されている。³⁾

参籠して九五日目の暁、観音菩薩が出現して「そなた親鸞が前世からの因縁によって結婚することになったならば、自分がすばらしい女性となってそなたの妻となり、来るべきそなたの臨終に当たっては、手を執って極楽浄土に導いてあげよう」というお告げを与えられた。いわゆる「行者宿報の偈」である。ここに親鸞は極楽往生

筑波大学名誉教授今井雅晴先生は、二〇一二年八月三日に古稀の寿を迎えられる。本書は、今井先生にお祝いとして献呈させていただくものである。本書を先生に献呈させていただくことにより、先生の学恩にいささかなりとも報いたいと念ずる次第である。

今井雅晴先生は、一九七七年に東京教育大学大学院博士課程を修了し、文学博士を授与された後、茨城大学に赴任された。一九九七年には筑波大学に移られ、歴史・人類学研究科長や日本語・日本文化学類長などの要職を歴任されつつ、研究・教育に邁進された。

研究者としての先生は、毎年数冊のご著書を出版されるなど、大変精力的であった。先生は、新たな史料を調査・蒐集して精緻な解釈を加え、その上で独自の視点から論じることにより、これまでの通説を次々に書き換え、常に日本中世宗教史研究を先導されてきた。

また、教育者としての先生は、演習の際の発表内容や論文についてはもちろんのこと、話し方、文字の書き方、日常生活のあり方にいたるまで、細部にわたって厳しい中にも暖かみのある指導をして下さった。そうした背景には、先生ご自身が厳しく身を律してこられたことがあると推察される。今井先生の研究および教育に対する大変熱心な姿勢には、多くの学生が影響を受けた。そのおかげで、受講生は、大学をはじめとする各種教員、研究員、学芸員、公務員などとして活躍することができているといえよう。

また、先生は、日本のみではなく海外にも広く目を向けられ、コロンビア大学やプリンストン大学をはじめとする海外の大学で客員教授をつとめられ、諸国の学生が日本文化に対する認識を深めるのに多大な貢献をされた。また、その成果を必ず本としてまとめられたことは、日本文化を学ぼうとする海外の学生

のみならず、海外で日本語を教える日本人学生にとっても大変役立つている。

そして、筑波大学ご退職後には、真宗文化センターを設立され、現在にいたるまで同センターの所長をつとめられている。また、引き続き各地で講演活動をされ、ご研究の成果を分かりやすく社会に開陳されているほか、客員教授として台湾の国立政治大学やエジプトのアインシャムス大学に赴任されるなど、海外での研究・教育活動も積極的に行なわれており、幅広く精力的にご活躍されている。このようなことから、本書には、海外で日本研究を行なっている方々からもご寄稿いただくことができた。

二〇一一年および二〇一二年には、親鸞の七五〇回忌として、親鸞や浄土真宗に関わる展示が各地で行なわれ、多くの書籍が出版されている。そうした中、親鸞や浄土真宗の研究に再度注目が集まり、新たな視点での研究・見直しが進められている。本書もその一翼を担い、親鸞や浄土真宗の研究の進展に少しでも貢献できれば望外の喜びである。

今井先生と関係の深い、第一線で研究されている方々に原稿の依頼をしたところ、幸いなことにみな快諾していただき、このように出版することができた。これも、ひとえに今井先生のご人徳によるものである。ご多用にもかかわらず、ご寄稿いただいた執筆者の方々には、さまざまにご協力いただき、お礼申し上げます。また、このような書を出版することをお許し下さった今井先生には改めて感謝申し上げますとともに、今後における先生の益々のご活躍を祈念したい。

二〇一二年三月吉日

今井雅晴先生古稀記念論文集編集委員会

山田雄司

阿部能久

小山聡子